
我は北斗の

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我は北斗の

【Nコード】

N2285A

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

叙情的と分類されるものでしょう。蘭と、英理、そして、蘭とコナンの交差する心といった所でしょうか？

英理は蘭の運んできたコーヒーに口をつけた。
いい香りだ。

「ああ、美味しい」

思わず声が出る。

カップをテーブルに戻すと携帯が鳴った。

耳に当てると思いがけぬ声がした。

「ああ、九条さん」

短い会話を終えると、蘭の心配そうな視線と、ぶつかった。

「ね、お母さん。九条さん、何か言ってきたの？」

声が不安に満ちている。

「一体どうしたの？蘭」

「だって、前の事件の時、九条さんとお母さん……。それに・・・」

蘭は英理の視線から目をそらした。

英理はかすかに笑った。

「蘭が、試合の近い時期に、急に晩御飯、

作りに来てくれるなんて変だと思ったのよね。

栗山さんが、何か言ってきたの？」

「詳しくは、話せないけど、お母さん、仕事で、疲れることがあったから、

何気ない振りして会ってあげてって。

私は、お母さんの元気の素だから。

ねえ、もしかしたら、九条さん、お母さんに負けたからって文句言ってきたの？」

もし”そうだ”と答えたら、そのまま、九条検事のところへ乗り込んでいきかねない

蘭の様子を見て、英理は、微笑んだ。

”少し早とちりで、一途な・・・やっぱりあの子供ね”

「蘭、勝った、負けたって、空手の試合じゃあないんだから。」

私たちは、勝負しているわけじゃあないの。

周りの人は面白がって、マドンナと、クイーンの対決なんていっているけど、

九条さんにしても、私にしても、

事件に関わった事で、人生を変えざるを得なかった人達が、少しでも、よい方向へ、歩めるようにと思っているの。

そのために真実を明らかにする。

そして、お互いの立場から、努力をしている。

ただそれだけなのよ。

私たちが対峙しているのは事件。

今回は、私たちは完敗してしまった。」

英理の言う意味がわからず蘭は、母を見つめた。

「さっきの九条さんの電話は、私を心配してかけてくれたのよ。

私の方が、被疑者に深く関わっていたから、ショックも大きいだろうって。

でも、私は、大丈夫。だから蘭、気にすることは無いの」

蘭は、英理の向かいのソファから、英理の隣に座りなおした。

「ね、お母さん。」

お母さんの仕事では、家族にも、秘密にしなくちゃならないことがあるのは

私にも分かるの。

それに、私が心配したって、何の役にも立たないかもしれない、けどお母さんは私のお母さんだし。

九条さんは心配してよくって私じゃダメなの？

やだ、私何言ってるんだろっ」

英理は、しばらく無言で蘭の髪をなでていた。

やがて、視線を窓のカーテンの方に向けて話し出した。

「被疑者が、自殺したの。」

当番で私が受け持った、女の人。

夫を殺した容疑。

でも、その夫は、その人を働かせて、自分は遊んで、愛人を作って、保険金目当てで妻である、その人を殺そうとしてた。

決行の時、妻に抵抗されて、突き飛ばされて、

そして、テーブルの角に頭をぶつけて、死んでしまった。

状況から見ても、それは明らか事だったの」

「お母さん、それって、正当防衛じゃあ？」

英理は、蘭を優しく見つめた。

「そのはずなのだけど、本人は殺意を認めたから。

どちらにせよ、情状酌量の余地は相当あった。

でもね、彼女にとっては、裁判所の判決なんてどうでもよかった。

私が、話を聴きに行くと、こう言っていたわ。

『あの人が、お金が欲しくって私を殺すのなら、かまわなかった。

でも、他の女の所に行くのは許せない。

でも、あの人のいない世界も、耐えられない』

私は、何度も言ったのよ。

『罪を償って、新しく生き直しましょうね』

でも……。

彼女にとっては、あのロクデナシが一番の人だったのね。

後を追うほどに……」

英理は、しばらく黙って、外を見ていた。

蘭は、母親を慰めるために何か言いたかった。

しかし、事実の重みの前に、言葉は何一つ見つからなかった。

英理の手は、蘭の髪を優しく撫で続けた。

やがて、誰に話し掛けるとも無く英理がつぶやいた。

『我は北斗の星にして、

千年ゆるがぬものなるを

君が心の天つ日や

あした
朝は東、暮は西』

蘭がきいた。

「お母さん、それ、何かの詩？」

英理は微笑んだ。

「昔ね、高校時代、何かの本で読んだの。

昔の中国の詩。

『恋愛天文学』って言う題がついてたわ。

いつの時代も、二人の仲は変わらないのね。

ただ、好き勝手に生きるわがままな人間、それなのに
どうしてか、そんな人を好きになつてしまう人がいる」

再び黙つて、遠くを見つめる英理に蘭は小さな声で言った。

「ねえ、それって、お母さんと、お父さんのこと？」

「あら、冗談じゃないわ。

私は、あんな勝手な男なんか、どうでもいいのよ。

でも、蘭、あなた、辛いわね」

「ええ？私、新一のことなんかなんとも思つてないわよ」

「あら、蘭。私は新一君とは言つていないわよ」

からかうように、笑う英理に、蘭はむきになつて言った。

「お母さんったら。

それに、新一は、女の子より、事件ですもの」

英理は柔らかに蘭の髪をまたなでた。

「女の子より、『事件』の方が手強い相手よ、蘭。

できることなら、あなたの側にずつといて、思つてくれる人を
好きになつて欲しかつただけど・・・。

自分にだつてどうする事もできない心を、いくら母親とはいつても
動かせないわね」

「だから、新一は、ただの幼馴染なの」

頬を赤くして、うつむく蘭に英理は優しく言った。

「新一君はまだ、戻つて来そうにないの？」

「分からないわ、でも、新一の事だからきつと事件を解決して戻つ

てくる。

私が心配していた事なんか、きつと気づきもしないで、子供みたいに、自慢げな笑顔でね」

「そうね、きつとそうね」

母娘は、それぞれの想いを抱えて静かに寄り添った。

蘭が家に戻ると、案の定、小五郎は、酔いつぶれて眠っていた。布団をかけてあるその横で、コナンがあぐらをかいて本を読んでいる。

「お帰り、蘭姉ちゃん。

おじさんどうしても、ベッドまで動いてくれなくって、とりあえず布団かけといたんだ」

「ありがとうコナン君」

蘭は、父親を、揺り起こす。

「なんだ、蘭か、いい女とせつかく飲んだのに」
手荒く寝室に、連れて行き、着替えるようにきつく言う。

「わったよ。英理はどうした」

「お母さんはお父さんと比べたら思いつきり大丈夫です！」

蘭は小五郎を、ベッドに放り込み居間に戻った。

改めて部屋を見回す。

テーブルの上は綺麗だった。

「お父さん、コナン君を置いて飲みに行ったのね」

「違うよ、蘭姉ちゃん。

蘭姉ちゃんが、急におばさんの所に行ったから、何かあったんじゃないかって気にしながら待ってたんだよ。連絡とかあるかも知れないって。

そのうち、待ちくたびれて飲み始めちゃったけどね。

片付けは、僕しといたよ」

蘭はため息をついた。

「我は北斗の星にして・・・か」

「なんなの？蘭姉ちゃん」

蘭はコナンに、微笑みかけた。

子供に、この詩を説明してもわからないだろう。

「北極星は、ずーっと、動かないってことよ」

すると、コナンは目を丸くして言った。

「違うよ、蘭姉ちゃん」

「違うって？何が、コナン君」

「北極星は動くんだよ。」

北極星は、天の北極から本当は少しだけ離れてるんだ。だから、一晩のうちに、小さく円を描いて動くんだよ。

それに、今の北極星は、昔の北極星と・・・」

自慢げに話すコナンの姿が、なぜか新一に重なった。

『だから、ホームズは・・・』

こちらの想いに気づかず子供のように輝く瞳で、好きな話を話すその姿。

思わず蘭はコナンを強く抱きしめていた。

「え？蘭姉ちゃん？どうしたの？」

いきなり抱きすくめられて、コナンは、驚いた様子だった。

蘭は、少しだけ、腕の力を抜いた。

「ごめん、驚かせて。ただ、ただね」

そのまま、想いを口にすると涙がこぼれそうな気がした。

深く息を吸って、気持ちを落ち着かせる。

「コナン君の、恋人になる子って、大変だろうな、って思ってた」

「蘭姉ちゃん。どうしてそんな話になるの？」

顔を赤くしながら言うコナンに蘭は笑顔で言った。

「なんだか、おなかすいちゃった。」

ココアでも一緒に飲もうか？」

コナンは元気よく頷いた。

「僕、入れるよ。蘭姉ちゃんは座ってて」

コナンはココアを蘭の前に置いて言った。

「蘭姉ちゃん、新一兄ちゃんはきつと帰ってくるよ」

蘭は、僅かに目を見開いた。

” 分かっているようで、分かってない。

分かってないようで、分かっている。

本当に新一そっくりだ。

それとも、男の子って皆そうなのかしら？ ”

蘭は、笑顔を作って、コナンに言った。

「分かっているわ、ありがとう、コナン君」

二人の微笑みは、暖かな湯気の中で交差した。

（おわり）

（後書き）

（なんじのたわ言）

「A i l a b C o n a n」様、お受け取りありがとうございます
す m (——) m。

性格の悪い私にとって、蘭は一番動かし難いキャラクターです。

読まれた皆さんの蘭のイメージとあっていれば良いのですが（^^；
）

さて、お話の中でひかせていただきました、詩は、中国の「子夜」
と言う方の詩です。

大分昔に読んだ本（色々な詩のアンソロジーでした）からとりまし
たので出版社や、

題名がわからない点を、お許しください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2285a/>

我は北斗の

2010年10月9日04時23分発行